



学習環境移行時の学習者の語りと知識の深化

著者	茂呂 雄二
発行年	2012
その他のタイトル	Leaner ' s discourse and the deepening of knowledge in boundary crossing processes
URL	http://hdl.handle.net/2241/118535

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 1 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21530677

研究課題名（和文） 学習環境移行時の学習者の語りと知識の深化

研究課題名（英文） Learner's discourse and the deepening of knowledge in boundary crossing processes

研究代表者 茂呂 雄二（MORO YUJI）
 筑波大学・人間系・教授
 研究者番号：51057939

研究成果の概要（和文）：

質的調査方法にもとづいて、①移動、②移入、③移転の学習過程を明らかにした。移動については、船員と看護職に対してインタビューを行い、アイデンティティの獲得と組織的な学習過程を明らかにした。移入については、小学校における伝統芸能の総合学習から、コミュニティ形成としての学習過程を記述した。移転については、農業従事者へのインタビューから世代継承過程を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Based on qualitative methods, this research explicates three aspects of learning processes: transition, transfusion, and transmigration. In transition, learners move from some site to others. In transfusion learning, some professional with some special knowledge and skills move into school situation. In transmigration, new generation inherits some skills and knowledge from preceding generation. In this study, interviewing with sailors, nurses, professional on Japanese traditional music and instruments, and farmers, we shed light on these three aspects of learning processes.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
平成 21 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
平成 22 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
平成 23 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総 計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：テキスト言説分析、環境移行、移動による学習、移入、移転、
質的方法論、技術継承、次世代育成

1. 研究開始当初の背景

学習の問題を考えると、環境の移行のプロセスは、これまで十分に光のあたらなかったプロセスである。環境移行を明らかにすることで、これまでの学習を他者視点から眺める、世代間の継承過程に広げる等の、学習論の拡張が期待できる。

現在「学習科学：Learning Science」と呼ばれる新しい研究領域が、心理学、社会学、コンピュータサイエンス等の学際領域として生まれつつある（Sawyer, 2005）。学習科学はコミュニティでの共同学習など、従来見逃されてきた学習の場面・状況に着目し、学習概念（学習とは何か）を再構築しつつある。学習科学では従来の学習理論が学習者の能動的な活動や意味付けを無視しがちだとして教授偏重主義（instructionism）と呼んで批判する。教授偏重主義以外の学習理論を打ち立てて学校教育を再生するには、特別の教授過程なしで進行する日常生活の協同的学習に注目して、それを学校のフォーマルな学習と比較することが重要視される。本研究は、この学習科学の提案を実証的に具体化するものである。特に、日常学習環境と学校等のフォーマルな学習環境とのあいだの、環境移行がもたらす学習の変化に着目して、さらにそれを人々の語りを通した意味付けから分析する、という具体化を目指す。

2. 研究の目的

学習科学の観点にたつ本研究は、卒業後に就職し現場での実践に関わるといった環境移行を伴う学習過程に着目し、テキスト言説分析と呼ぶ質的方法で調査分析することで、従来の学習論では捉えられてこなかった言説実践を介した学習の意味付けの深化を明らかにすることを目的とする。本研究では、(1)移動(transition 学校から職業現場などの実践場の移行)、(2)移入(transfusion 外部専門家が学習環境に参入するなどの学習環境の転換による移行)、(3)移転(transmigration 専門家・実践家コミュニティの次世代育成や技術継承にみられるコミュニティの世代間移行)の3種類の学習環境移行事態に着目し、①移行に関するインタビューおよび観察データを収集し、②移行に伴う活動の意味付

けの変化と知識内容変容を学習者自身の言説（語りによる意味付け作用）から明らかにし、③移行と言説実践を組み入れることで学習科学の理論的拡張を目指す。

学習科学では、従来の実験室による短期的な学習研究を反省し、研究のスケールアップが求められている。本研究は、3種類のスケールアップを特色とする。まず①3種類の移動場面に着目することで、環境移行の前後を検討する、時間的スケールアップが可能となる。次に②学習される知識内容に加えて、学習を意味付ける言説実践を追加することで言語資料のスケールアップをはかり、学習過程を立体的に描くことができる。最後に③方法的なスケールアップ、つまり語りデータと観察・相互行為データの突き合わせを可能とする。このようなスケールアップした資料は、従来整備されておらず、貴重である。

本研究は、学習を言説の編成替えからの視点から理解するもので、従来の学習理論では十分ではなかった観点を提供して学習理論を拡張するものとなる。

3. 研究の方法

本研究は、看護学生が卒業後に病院で働くといった、学習環境移行を伴う学習過程を質的方法を用いて調査する。調査を通して、学習環境の改訂・デザインに役立つ、“より深い”学習過程に関する知見を提供するとともに、質的方法論を洗練することを目的とする。

①移動(transition 学校から現場へ)、②移入(transfusion 専門家が学校でワークショップを行なう)、③移転(transmigration 農家で家督を継ぐ)の3種類の学習環境移行について、①環境移行後のインタビューデータならびに②移行前後の活動の観察データを収集して、(1)テキスト言説分析並びに(2)相互行為分析を施す。

(1)理論および方法論の検討

学習科学ならびに社会文化的心理学のレビューを行ない、環境移行を伴う学習に関する研究の現状を把握する。またテキスト言説分析の評価を行った。

(2)インタビューデータ資料収集

① 移動：新人看護師・新人教師を対象に、環境移行に関する半構造化面接を行ない

インタビューデータを収集した。

- ② 移入：大阪市内の小学校1校における、伝統文化に関する授業に関わる、外聞専門家、受け入れ側の小学校教諭ならびに地域住民30人を対象にインタビューデータを収集した。
- ③ 移転：山形県三川町の農業従事者15人を対象に、家督継承に関する半構造化面接を行ないインタビューデータを収集した。

文字化並びにビデオクリップの作成ののちに2種の分析を施し、環境移行の際に経験されるギャップやジレンマの意味を質的に明らかにし、スムーズな環境移行を促すような学習環境の提案に結びつける。必要に応じて、分担者及び協力者が集合して、途中経過を相互報告し批評しあう予定である。また外国人研究者を招聘して、公開のワークショップを行ない、分析手法と結果の解釈を洗練する。成果を得次第、内外の専門誌に報告する。

4. 研究成果

1 移動に関しては、教員、船員、看護職に対して、インタビューならびに参加監査を行った。

2 移入に関しては、伝統芸能の実演家が小学校の総合的学習の時間で、行なったワークショップについて参加観察ならびにインタビューを行なった。

3 移転に関しては、農業従事者に対して、子世代と親世代にインタビューを行ない、世代継承の意味をたずねた。

これらの資料をもとに、ネットワークの形成と再編過程として、学習過程を分析する理論的な視座を開拓した。

以上の研究成果のうち、2については、移入の学習過程で、野火的活動と呼ぶべき興味深い現象が生起することが確認できた。伝統芸能を学校で実践するためには、学校と学校を取り巻く様々なセクターが相互につながりあい、新しい実践的活動を組織することが必要となる。このとき、とくに活動全体の配置や全体の動きを監視するようなセンターがないままに、活動が進行することが秋ラマになった。これは野火的な活動とも呼ぶべきものである。

この活動には、学校、市の教育委員会、学校近くの国立文楽劇場、学校での文楽学習を支援する文楽技芸員、文楽関連のNPO法人、文楽学習に参加する6年生の保護者、学校周辺の地域住民、学校周辺の地域問題に関わるNPO法人などが、ステークホルダーとなる。

これらのステークホルダーは、子ども文楽実践にかかわる動機として、それぞれの動機をもっており、その動機は多様である。学校

は、教育方法が十分確立されているとはいいがたい総合的学習を確立することを動機としている。文楽技芸員をはじめとする文楽関係者は、現在のところ大衆的な任期を博しているとはいえない文楽の再活性化を狙っている。また、地域おこしのNPO法人は、文楽を地域の浄化と活性化の起爆剤に使用というもくろみがある。学校周辺の住民には、地域のシンボルである小学校の活性化を願っている。

この活動に見られる、人々のつながり・ネットワークを支えるのは、金銭的な支払と対価といった等価交換ではない。むしろ、みな、子ども文楽実践に対して、さまざまなリソースをいわば贈与することで、実践成立に貢献している。

こうした贈与の関係を通して、参加者が受け取るのは、イメージ上のコミュニティへの帰属感である。知己住民へのインタビューへは、彼らが自分たちの街を『文楽の街』と表象していることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

①Shiroma, S. and Moro, Y (2011). Art and network in and around school: Re-organization of community association through traditional art activity. Paper presented at 3rd International Society of Culture and Activity Research, Rome, September 8, 2011. 査読有り

②Moro, Y (2011). Reducing Schoolwork Burdens, Improving Academic Performance in Japan. Paper presented at Basic Education Forum in The 8th Beijing International Education Expo, Beijing, June 16, 2011. 招待講演 査読有り

③岩木穰・太田礼穂・守下奈美子・灰田和正・韓東哲・香川秀太・臼井東・茂呂雄二 (2011). 大学院生メディアータを活用した看護実践者のワークショップ, 筑波大学心理学研, 42, 1-8. 査読有り

④太田礼穂・茂呂雄二 (2011). 幼児期の物語理解は養育者にどのように捉えられているか—絵本読み聞かせ活動を中心に— 筑波大学心理学研究 42, 9-20. 査読有り

⑤徳舛克行・茂呂雄二 (2009). 小学校教師間

ネットワーク分析-相談・被相談関係からネットワークを捉えるー 筑波大学心理学研究, 39, 1-9. 査読有り

〔学会発表〕(計4件)

①Moro, Yuji (2010). Mediation process in post-industrial society. *Paper presented at Nordic Conference on Activity Theory and the Fourth Finnish Conference on Cultural and Activity Research (FISCAR10)*, University of Helsinki, May, 25 2010, Helsinki, Finland. 査読有り

②Moro, Yuji (2010). Industrial Society: Marx, Vygotsky & Mediation process. *Paper presented at Marxism and Psychology Conference. August 7, 2010 at Prince Edward University, Sharlottown, Canada.* 査読有り

③ Moro, Yuji (2010). Politico-Affective Process and Discursive Practice in the Transitive Learning. *Paper presented at International Conference on Educational Research, Seoul National University. September, 30 2010.* Seoul, South Korea. 査読有り

④ Kagawa, S. and Moro, Y. (2009) Spinozic Re-considerations on the Concept of Activity. In A. Sannio, H. Daniels, & K. Gutierrez (Eds.), *Learning and Expanding with Activity Theory*. New York: Cambridge University Press. 査読有り

〔図書〕(計2件)

①茂呂雄二他(編著)(2011). 社会と文化の心理学 世界思想社 200頁

②茂呂雄二他(編著)(2012). 活動と状況の心理学 新曜社 250頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

茂呂 雄二 (MORO YUJI)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号: 50159739